

# ブラキムラとめぐる！仙台城下町ボヤージュ 【2024年11月5日放送分・原町／大源横丁】

毎月第1火曜日に放送しています。歴史家で街歩きの達人・ブラキムラこと木村浩二さんと、旧城下町に88本ある石柱＝辻標から歴史の痕跡を探る旅です。街歩きのお供には、仙台市役所1階の市政情報センターなどで販売中の冊子、その名もズバリ「辻標」が便利です。88本ある辻標の場所や周辺の歴史が、写真とともに分かりやすく解説されています。

- シリーズ「東番丁の旅」は、東十番丁まで紹介が終わりました。今回はさらにその先、城下町の東の入口である原町を歩きます。国道45号線沿い、安田病院向かいの仙台合同庁舎の辺りには江戸時代、藩の米蔵と材木蔵がありました。原町が、塩釜港で水揚げされた海産物や物資の通る重要な流通路だった事が分かります。
- 今月の辻標は「原町／大源横丁」。豪商・大内屋源太右衛門が、実家の土地を割いて原町と清水沼をつないだのが大源横丁です。清水沼は藩政期の絵図を見ると、現在の清水沼公園ほどの大きさで描かれています。湧き水を利用してビール工場が作られたほどですが、戦後は生活排水が流れ込むなどして汚染が進みました。昭和40年代に埋め立てられ、公園となって今に至ります。
- そもそも原町は、宮城野原の原野を臨む事からこう呼ばれました。古代から東北地方を南北に貫く幹線道路「東山道」も、この辺を経由したようです。江戸時代以前は領主の国分氏の荘園の一部でしたが、伊達政宗の仙台開府以降、城下町への東の関門として宿場町を形成しました。明治時代には、宮城郡の役所も置かれたのです。

- また大源横丁には、以前に荒町の毘沙門天境内からご紹介した「奇縁二天石」と同じ石柱が現存しています。奇縁二天石とは、“たづぬる方”と”をしうる方”の面にそれぞれ求人募集とそれに対する応募の紙を貼る「掲示板」のようなもの。幕末に設置された荒町の奇縁二天石のアイデアを拝借して、明治後期に大内屋源太右衛門が立てたものです。何と木村浩二さんは、東一番丁と大町の辻にあった大内屋(現ZARA)の前にも、源太右衛門がかつてこの奇縁二天石を立てていたという事を、当時の広告(銅版画)から発見したのです。江戸時代のコンセキが色濃く残る原町。続きはまた来月です。ぜひ、皆さんも歩いてみて下さいね。



〈文・佐々木淳吾〉